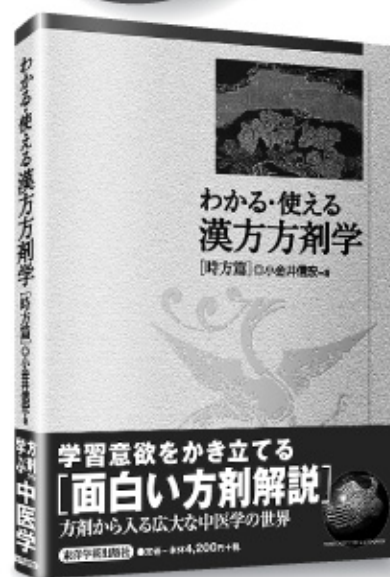


方剤から入る広大な中医学の世界。

図解・表解でわかる
方剤の意味
比較方式で各方剤の
特徴を解説



著者◎小金井信宏

著者は、10年間中国に留学、日本人として史上初の
碩士（北京中医药大学大学院修士課程）となる。

- 学習意欲をかき立てる
「面白い」
方剤解説。
- 1 学ぶ楽しさ——中医学の教材として
- 方剤という窓口から、広大な中医学の世界へ入ることのできる本。
 - 背後にある理論とつなげて、方剤を理解する。
 - 原典のほか、歴代の多様な用法、関連する理論・手法を紹介。
 - 1970年代以降の現代中医学の研究成果も盛り込む。
- 2 使う楽しさ——臨床の実用書として
- 方剤ごとに「適応証」「薬の作用」「使用法」を分かりやすく解説。
 - 方剤を「さまざまな用薬法の集合体」と捉え、多くの応用例を紹介。
 - 常識的な使用法のほか、広い範囲にわたる発展的用法も知る。
 - 「漢方製剤の使い方」から「生薬の処方」まで、段階的に理解する。



東洋学術出版社

〒272-0822 千葉県市川市宮久保3-1-5 / 電話047-371-8337

E-mail: hanbai@chuui.co.jp ホームページ <http://www.chuui.co.jp/>

ご注文は、メールまたは
フリーダイヤルFAXで

FAX 0120-727-060

《味わつて読みたくなる方剤の基礎知識!!》

わかる・使える

漢方方剤学

「時方篇」 小金井信宏 著 B5判並製 / 本文352頁
定価：本体4,200円＋税（送料315円）

NEW ISSUE
新刊



補中益気湯

◇甘温徐熱の代表方剤 ◇補気昇陽の代表方剤

補中益気湯とはどんな方剤か

- 補中益気湯のなりたち
- その後
- 補中益気湯の“益”について

1 基本を押さえる

1. どのような患者に使うのか？

- 補中益気湯の適応証
 - ①李東垣が提示したもの
 - ②現在の一般的な認識
- どんな疾患に使えるのか

2. 補中益気湯とはどんな薬か？（構造と作用）

- ①李東垣，本人の解説
- ②補気昇陽方剤としての解釈
（現在の一般的な理解）
- ③甘温徐熱方剤としての解釈

3. どのように使うのか？

- 基本的加減方
- 用量について
- 使用上の注意

2 応用のための基礎知識

（背後にある中医理論）

1. 基礎理論

- 李東垣の医学理論
- 昇陽のいろいろ
- 陰火のいろいろ
- 甘温徐熱法とは

2. 臨床応用

【耳鼻咽喉科疾患への応用】

- 老中医たちの考え方と経験
 - ①蒲輔周氏の方法
 - ②干祖望氏の方法
 - ③蔡福養氏の方法

【慢性肝炎への応用】

- 老中医たちの考え方と経験
 - ①屠揆先氏の方法
 - ②史濟招女士の方法

3 疾患別使用例（治癒例のまとめ）

1. 神経科疾患—①高血圧 ②神経衰弱症
2. アレルギー疾患—アレルギー性鼻炎
3. 婦人科疾患—習慣性流産
4. 消化器系疾患—胃下垂
5. 泌尿器系疾患—慢性の血尿
6. 肛腸科—内痔
7. 男性科疾患—精子減少
8. 眼科疾患—網膜色素変性

目次（主要20方剤と加減方100方剤）

- | | |
|-------------|--------------------|
| ◇六味地黄丸 | ◇平胃散 |
| ◇知柏地黄丸 | ◇藿香正氣散 |
| ◇杞菊地黄丸 | ◇補中益気湯 |
| ◇附—その他の地黄丸 | ◇附—20世紀の「補中益気湯」加減方 |
| ◇独活寄生湯 | ◇帰脾湯 |
| ◇二陳湯 | ◇血府逐瘀湯 |
| ◇附—その他の二陳湯 | ◇補陽還五湯 |
| ◇温胆湯 | ◇逍遙散 |
| ◇附—その他の温胆湯 | ◇竜胆瀉肝湯 |
| ◇四物湯 | ◇黄連解毒湯 |
| ◇附—その他の四物湯 | ◇防風通聖散 |
| ◇四君子湯 | ◇玉屏風散 |
| ◇附—その他の四君子湯 | |
| ◇香砂六君子湯 | |

「履歴書の束」から「活きた方剤学」へ

この本は、私が理想とする「方剤学の教科書」を形にしてみたものです。

方剤学の教科書とは「履歴書の束のようなもの」に過ぎないと、私は考えています。どんなに有能な人でも、履歴書をみただけでは、その人材を適材適所で使いこなすことはできません。それは方剤も同じです。「その方剤は、どんな理論に基づいて作りだされたのか」「その理論は、どのように生まれたのか」「その手法や理論は、その後どのように受け継がれ、現在はどのような位置にあるのか」など、1つの方剤を理解するには、その周辺の事情をたくさん知る必要があります。

しかし中医学の世界には、主要な文献だけでも数百冊はくだりません。その内容を可能な限り盛り込み、読んだ後で「よく分かった」と実感できるような本を作りたいと努力してみました。とても「理想の教科書」とはいえませんが、少なくとも「履歴書の束からは脱皮したもの」として、本書を世に送り出したいと思います。

（著者「まえがき」より）